

入選

「ねずみ騎士デスペローの物語」

ケイト・ディカミロ（ポプラ社）

フードビジネス学科 田中沙織

ねずみの騎士デスペロー物語を読んで。

この作品を読み終えたあと、とても幸福な気持ちでいっぱいでした。中学生のころ本屋さんで一目ぼれをしてお母さんに買ってもらったのを覚えています。あのころ家に帰ってじっくり意味を理解しながら読み進めていきました。しかし、飽き性だった私はすぐに飽きてしまい、途中で投げ出してしまいました。そして大学生になった今、こんな子供のころの本を読書感想文にするのはおかしいと思いましたが、もう一度読んでみて、あのころの自分とは違った見方をすることができました。

この作品はねずみと人間の恋のお話です。最終的にはハッピーエンドになります。暗がりで一筋の光を見つけたねずみ『デスペロー』。その光をたどっていくと、言葉では言い表せないほどの美人が待っていました。デスペローが住んでいた場所は一国の王様のお城だったのです。

実は、デスペローは一度ねずみ界から追放されました。悲しみでいっぱいのデスペローを救ったのが、その王国のお姫様『ピーチ姫』です。

悲しみとはだれでも持つ感情です。親から見放されたデスペローはどんな感情だったのでしょうか。もし自分が親から見離され、友達からも避けられ、その世界からも受け入れてもらえなくなったとき、どんな気持ちになるのでしょうか。きっと私はこの世から消えたいと願うでしょう。でも、この本の主人公はそうじゃなかった。前向きにただひたすら、一筋の光を追いかけました。そのあたりから私は自分の考え方についてもう一度見直すことができました。

今の子供はゲーム脳だとよく言われます。そのせいなのでしょう。物事をプラスではなくマイナスに考えてしまいます。普段から私はポジティブに考える性格をしていると思うのですが、実際に小説などを読んでみると、このような状態のとき自分はどうするのだろうか。と考えたとき、すぐにマイナス思考に変わってしまいます。読んで改めて考えることができました。

友情が大切なのは昔から知っていました。ただうわべだけの友情じゃなくて、こころから信用できる相手と友達になってそれが友情であることを。でも最近では周りに合わせるだけの薄っぺらい友情をよく見かけます。毎日同じ話を繰り返して、面白みのない友情はいりません。友情についてもこの本からまた考えさせられました。友達はいないよりいたほうがいい。そんな考えがあるから人間は周りに流されやすい。きっとそうだと思います。

す。確かに友達が必要です。でもただ一人になることを恐れて誰かと一緒にいなきゃいけないのならやめたほうがいいと思います。自分を苦しめているだけ。

デスペローが光の先で見たお姫様は美しすぎて、すぐに恋をしてしまいました。デスペローはその恋が報われることを信じてひたすら走りました。恋というものはとても儚くて、切ないものです。この思いのおかげでデスペローは前向きに進んでいくことができたんだと思います。大切なことは人を想う気持ちです。この気持ちは人を元気にしてくれたり、その人の原動力だったりします。大切な人のために生きている人だっているはずで、私も今、家族と友達と暮らすこの世界が好きで生きています。なにかのために生きることが決して悪いことでなく善いことです。きっと私はこの先も大切な人のために生きていくでしょう。

作者のケイト・ディミカロがこの物語を書き始めた直後、アメリカで大きな事件が起きました、2001年9月11日の同時多発テロ事件です。世界中が恐怖と悲しみにおおわれているときに、「ネスミとお姫様のおとぎ話」など書くことに意味があるのか。ディミカロさんは悩んだそうです。しかし飛行機で会った見知らぬ男性に、こう励まされたそうです。「こんなときだからこそ、物語がもっと必要とされているのではないですか？」と。作者は「物語の力」を信じ、書き続けることによって、暗い闇を乗り越えたそうです。

『物語りは光だ』という言葉には、作者の想いのすべてがこめられている気がします。けれど私たち読者は、あまり難しいことを考えず、この「ヒーローっぽくないヒーロー」の冒険の物語を楽しみましょう。素晴らしい物語は、デスペローをとりこにした音楽や光と同じく、頭ではなく「たましい」にはたらきかけるものなのですから。そして読み終えたあと、もし私たちの気持ちのありかたが、読む前と少しでも変わっていたら。自分の周りをいつもと違う目で見ることができたら。暗闇の中に光を見つけ出すことができたら。それこそが「物語の力」なのだと思います。

震災の日から日本人の人々は苦しみ悲しみを乗り越えてきました。今の日本だからこそ、物語が必要とされていると思います。小さな物語でいい。人々のこころがあたたまるとような小さな物語を大切に、これから生きていこうと思います。私はまたこの本を読み返すときが来ると思います。また違った感情が沸くと思います。そのときまでこの本を大切にしまって、自分の子供にも読ませてあげることができるようにしたいです。